

脳死の状態から呼吸が止まって母が亡くなり、その時、臓器提供のことが気になっていた。もし、母がドナーカードにサインしてあっても、僕は絶対に同意しない。

「脳死」を人間の死とすることに反対してきたが、あらためてその意を強くした。

故人の遺志を大切にしようということで、カードのサインが重要視されるのだろうが、死は、故人よりも、残された家族のものである。

死に立ちあう家族にとって「臓器」という言葉のつめたいこと。

・せめて「生命」であればとも思う。

ヒトがモノになって、電池を取りかえるように臓器が取り出され、運ばれてゆく。

その時の家族が同意するサインの何と重いことか。

本人が書いたドナーカードのサインより何倍も何倍も重いことだろう。

「臓器」とか「移植コーディネーター」という言葉は市民権を得ているのだろうか。

ヒトは亡くなってもヒトであるという仏教の考え方があってこそ、盆踊りや供養があるのである。

宗教によっては、ヒトは亡くなって魂は天に召され、魂の無い遺体はモノだから……。

しかし、ドナーカードに気軽にサインされると、その家族が

どれだけ悩み、苦しむかということ。「移植法」には示されていない。

日本人は、情の世界に生きている。

勿論、家族そろってドナーカードにサインをし、悩むことなくコーディネーターに連絡をし

死は残された家族のもの



永 六輔

て、すべてをまかせるといふ家族もあるだろう。

嬉しげになることを抑えてマスコミの記者会見をする医者もいるだろう。

いろいろな人がいていいが、多くの人が「臓器移植」という言葉に違和感を持っているのは確かだろう。

高価な商品としての一面を持つ臓器。

功名心に走る医者。

「誰からも貰わない。誰にもあげない」という多くの人の一人、母の死に立ちあって、実感として、脳死は死ではないと受けとめていた。

病院から帰宅した母の部屋から、母自身が縫いあげた死に装

束に、家族あての遺言が添えてあるのに気づいた。

「皆さんありがとう。喜んで西方浄土に参ります。用意した最後の着物に着替えさせて下さい」

家族の誰も、母が自分の「死に装束」を縫っていたことを知

東に、家族あての遺言が添えてあるのに気づいた。「皆さんありがとう。喜んで西方浄土に参ります。用意した最後の着物に着替えさせて下さい」

らなかった。

ドナーカードにサインをするのと、死に装束を縫うのでは、同じ死の覚悟でも、文明と文化の違いがある。

「臓器移植法」は、文明であって文化ではないのだ。

勿論、文明の恩恵を否定しは

しない。

しかし、文化と違って、文明はしばしば失敗する。

もう一度「死」を文化として考え直すべきである。

そして文明は人間の臓器に頼らないで、人工臓器の開発に、惜しみない予算と能力を投入するべきなのだ。

不良銀行に投入する公的資金を、人工臓器開発に使えばいいのである。

人工臓器なら誰に遠慮することなく移植が出来る。

文明は、人間がここまで出来るということを示し、文化は人

間がそこまでやってはいけなさと教える。

このバランスこそ、この国に失われてしまったものである。

母は家族に感謝し、自分で縫った死に装束を着て西方浄土に旅立った。

「大往生」のあり方を教えてくれた。

その鮮やかさに、優しさに家族は圧倒されたが、娘や嫁の中から声があった。

「アラ……どうしよう！私、着物が縫えないんだ！」

(えい・ろくすけ)作家・放送タレント)